

「あのね乳母、お母様がね。文子ちゃんはお母様の子ぢやない、すつと奥の、奥山からお猿が持つて来て臺所に棄て、行つた子だつて仰しやつてよ。本當？」

お春は文子の前に大きな梨を十ばかり並べてから、

「そんな事はありません。お嬢様はお母様のお子様に違ひはありません。ねえお美代さん！」

「さうですとも、お猿なんか掛つて来て棄てたお子様なものですか。」

文子は半信半疑、

「だつて皆さう云つてよ。お兄様も、お姉様も。だから私こゝに居たかないわ。乳母のところへ連れて歸つてお呉れねえ。」

「滅相な。そんな事は出来ません。そんな事は仰しやらないで、梨を召上れ、剝いて差上げますからね。」

とお春は帯の間から小刀を出して、一等大きな梨を剝いて文子に渡し、お美代にも三つ四つ遣りました。

「乳母さん、御緩り、後で文子様はお迎ひに参りますから。」

と云つてお美代は女中部屋を出ました。お春は、小さい聲で、  
「お嬢様、お母様はやはりお撲ちになりますの、ちよいく？」

「え、撲たれてばかりよ。だから乳母、連れて歸つてお呉れね。今日もね、こゝを煙管で撲たれたのよ。」

文子は二の腕を出して見せました。雪のやうな真白い文子の二の腕は煙管の跡が真赤に印いて居りました。

「まあ、こんなになるまで。さぞお嬢様お痛う御座いましたでせう可愛相に、かうまでなさらなくつとも。」

とお春は眼に一抔涙を溜めて、文子の二の腕を磨つて遣りました。「まだね。ヒリヒリするわ。そしてね、私の撲たれるのを、お兄様も、お姉様も面白さうに笑つて見てるのよ。」

「え、笑つて？ 本當に何と云ふ事でせう。」

お春は溜めた涙をハラ／＼と疊に落しながら、文子を抱寄せ、

「お連れ申して歸れるものなら……。」

と云つてしく／＼泣きました。文子も悲しくなつたものと見えて兩眼に涙を泛め、

「私、乳母の子になる事は出来ないの？」

「勿體ない。お嬢様には、お立派なお父様とお母様がゐらつしやるんで御座いますものを、もうそんな事は仰しやらないで下さいまし。」

し。

「だつて、乳母の子になりたくつて仕様がなないんだもの。お菓子だつて、玩弄だつて、私には滅多に下さらないのよ。文ちゃんはこの子ぢやないんだからつて。だからねえ乳母、私ちよつともこゝには居たいことはないわ。」

お春は、これが我子なら、たゞの一日も此家には置くまいものを七年の間、我子同然に育上げたとは云ひながら、御前様と奥様との仲に出来たお子様、なんぼ可愛ゆくつて堪らないにしろ、黙つて連れて歸る譯にも行かず、たゞ抱締て泣より外はないのであります。お春が泣けば、文子も涙を雫して泣きました。お春は文子の涙を

ハンカチーフで拭いてやつて、

「お嬢様、もうお泣きなさいますな、眼の縁が赤くなつて居ては、又お母様から何とか彼とかお云はれになりますからね。」

「乳母ね。私泣く時はね。便所の横の暗いところへ行つて、いつも泣くのよ。」

「え、便所の横の暗いところへ行つてお泣きなさいますの？ それ

は又なせで御座いますか？」

「だつて、お母様の前で泣くと、直き撲たれるもの。」

お春はこれ聞いて、いぢらしくつて堪らず、思はず聲を立て、

ワツと泣伏なみふしました。現在の親おやぢやもの、子こぢやもの、さうまで虐いぢめなくつてもさうまで憎にくまなくつても、とお春はるは腸はらわたも千切ちぢれさうになりました。

「だからね乳母はあや、連れてつて頂戴ちやうだい!

乳母はあやの家うちで私わたしは、乳母はあやの子こに

なつて、さうしてもうこんなところへは來こなくつても好いいやうにしてお呉くれ、ねえ乳母はあや!!」

取とり籠とられてお春はるはもう前後ぜんごの分別ぶんべつもなく、文子ふみこを横抱よこだきに抱だいた

まゝ、誰だれも居合あせなかつたを幸さいひに、勝手口かたてぐちから一目散もくさんに駈出かたし、裏門うらもんちか近くの車宿くるまやどの俵はつを雇やとつて、妹いもうとが縁付えんづいて居ゐる牛込區うしごめくへ駈かけさせ

ました。

牛込うしごめに着ついたお春はるは、文子ふみこを俵はつから抱下だきおろし、

「お嬢様おぢやうさま、今夜こんやは此家こゝに泊とまつて、明日あす乳母はあやの家うちへ歸かへりませうね。」

と云いひながら、妹いもうとの家うちのお座敷ざしきへ上あるなり聲こゑも惜おします泣倒なきたよれました。驚おどろいたのは乳母はあやの妹いもうと。

「どうなさつたんです一體たい? 何か氣きに食くはない事ことでありましたの

お邸やしきで。」

お春はるはやつと顔かほを上げ、

「氣きに食くふも食くはないも、まあ聞きいてお呉くれよ。今日けふと云いふ今日けふは

私も餘り情なくなつてお嬢様をお連れ申して丁つたのさ。」  
と一部始終の話を致しますと、妹も涙を流して、

「まあ、お可愛さうにね。けれども姉さん、お嬢様を勝手にお連れ申しては、さぞお邸で御立腹なさるでせう。」

「それは、さうだらうけれど、どうしてお嬢様お一人お邸に置いて歸れるものかね。もう例ひ何うならうとも、軀は八裂きにされてもお嬢様とは一生、死ぬまで離れない積りで來たのだよ——あゝこの儘、亞米利加へでも行つて了ひたい。お嬢様も、乳母の子になつて、お邸には歸りたくないと思はるものだもの。ねえお嬢様

さうで御座いますか？」

「さうよ、私ね、お百姓でも何でもするからね。もうお母様のところへは遣らないやうにしてお呉れよ。」

「え、もう決して、何のお邸へお連れ申しませう。誰が何と云つて來ても、決して、決して。御安心なすつてゐらつしやいませう。」  
と其晩は泣き明かして、翌朝お春は汽車から八王子町へ文子連れて歸りました。八王子町はお春の家のある町です。

するとお春が八王子町へ着いたまもなく、次の汽車から、男爵家の執事が文子を連戻しに參りました。

お春は、執事に向つて、思切つて男爵夫人や、外のお子達に文子に對する無情な仕内を罵つて、

「お嬢様は當分何と仰しやつてもお返し申す事は出来ません。」

ときつぱりと云切りました。執事は大層憤つて、例ひ警察の手を煩はしても文子様はお連れ申さねばならないと申しました。

「それでは警察へお訴へなさい。かうなれば私も意地づく、死んでもお嬢様は離しません。」

と云張りましたので、執事は止むを得ず警察へ願出しました。

お春は執事が警察へ願出た間に、すつかり身支度を致しまして、

警察から呼出状が来た時は、もう文子と二人、東京行きの汽車に乗つて居りました。

お春が警察の手に捕へられたのは、それから四ケ日目でありました。文子は直きに男爵家に引取られ、お春は幼女誘拐罪で裁判を受けねばならなくなりました。

男爵家では、文子が無事に歸つた上は、何もお春を罪人とするには忍びないと、いろ／＼評議の上願下げてやり、文子が十五歳になるまで、男爵家に置いてやる事となりました。

お春も文子も、それですつかり安心をしました。男爵夫人も、文

子に對する自分の仕内が餘り薄情であつた事を覺り、根が血を分け  
た自分の子でありますから、打つて代つて可愛がつておやりになる  
やうになりました。

お春はもう大喜び、

「これで私もやつと生返りました。もういつでも安心してお暇が頂  
けます。」

と云つて居ると云ふ事であります。

お伽悲劇集終

大正三年三月五日印刷  
大正三年五月七日發行

不許複製

河野紫地

著者

東京市日本橋區馬喰町四丁目十六番地

兼發行者

久保田長吉

東京市淺草區左衛門町一番地

印刷者

岩見米三郎

東京市淺草區左衛門町一番地

印刷所

清美堂

東京市日本橋區馬喰町四丁目十六番地

發行所

久保田書店

振替東京一七一九九 電浪花三八一九

譜作家名諸  
纂編春胡田飯

# 琵琶歌大鑑

(有所權著作)

入譜歌式圖▲在自吟獨付譜音

## 次目容内

櫻武春國旅九小	王本廣臺七城武噫乃明
藏日順連昭能	瀨灣卿石兩木治
狩野野船口城督君寺佐入落山坡尉將皇	浩中大天
吉河櫻吉吉河月夢奇辨蓬濶毒月鉢錦常	野内井野野中
ののの落落中	ののの
奥宿驛下上島陣	緣侍山江頭花木旗丸
俊俊狂遠考墨菅迷花松威袂	寬寬蘇の
(下)上女近森繪公	のの

餘頁百貳本美頗ス | ロク總

錢四金 稅郵 錢五廿金 價定



原田紫山先生著

少女お伽噺

袖珍頗美本

正價二十錢

郵税四錢

少女お伽噺は、面白いお噺や、悲しいお噺や、楽しいお噺やを、いくつもく書き集めた綺麗な本である。面白いお噺を読めば笑ひたくなり、悲しいお噺を読めば泣きたくなり、楽しいお噺を読めば喜びたくなるのが人情、しかも二冊の本で泣いたり、笑ったり、喜んだりされるのだから、何は捨て、も此本はお求めを願ひます。

藤川淡水先生著

お伽信玄袋

袖珍頗美本

正價二十錢

郵税四錢

お伽作家として有名なる著者の傑作十餘篇を集めた本である。お伽細工の信玄袋に入れたいけ、ごのお噺も面白い。中にも猪の世界一週、お婆さんの目、無法な狼などは面白いお噺の中での面白いお噺、お伽好きな皆さん、早く御注文にならなければ品切れになりますよ。

町田 櫻園 著

# 音曲獨習全書

菊判横本七十頁  
全部冊完成  
正價一冊金十五錢  
送料一冊金二錢

日曜の半日或は晚餐後の小閑などに一寸音楽を遣つて見たい、併し、ピアノ又は琴、三味線となるを大行になつて二年も三年も其方を専門にやらねば物にならぬ、それで、極簡易にやれるものは何かといふと、先づ、尺八手風琴、ハーモニカなどであらう、本叢書はこれらの樂器の獨習法を譜付にて説明しゐるもの、洵に花天月地の好同伴なるべし

明笛清笛獨習

手風琴獨習

ハーモニカ獨習

尺八獨習

ウワイオリン獨習

明笛尺八獨習

吹風琴獨習

鹿島鳴秋先生著

## お伽十二階

袖珍頗美本  
正價二十錢  
郵税四錢

お伽文壇に於て新進氣鋭の青年作家として知られたる、先生の傑作十二篇を集めたるもの、就中塔の姫は、毎日電報の懸賞に當選したる名作である。桃太郎、カチ／＼山の如き舊思想のお伽に飽いた諸君の机上を飾るべき書として切に本書を求められんことを望む

河野紫光先生著

少年 白虎隊

袖珍頗美本  
正價 二十錢  
郵税 四 錢

徳川幕府最後の頁を飾つた少年白虎隊の、涙も血もある物語は、日本少年武士道の大美談である。本書は會津征伐の顛末より、白虎隊士の銘々傳を詳説し、讀者をして血湧き肉躍るの感を起さしむる一大文字、少年の讀み物に乏しき折柄、斯かる書は蓋し争うて讀むべきの一つであらう。

原田紫山先生著

お伽悲劇集

袖珍頗美本  
正價 二十錢  
郵税 四 錢

此本には悲しいお噺を十篇ほど集めてある。世の中に美しいものも澤山あるが。同情の涙ほど美しいものはない。此本に集めてあるお噺は、十篇が十篇とも同情すべき物語で、泣くまいと思つても泣かすには居られない、それはく可哀さうな人達の身の上噺である。同情深い諸君の一讀を得れば、著者も大満足、涙脆い諸君も恐らく大満足であらう。

河野紫光先生著

乃木大將

袖珍頗美本

正價 二十錢

郵税 四錢

本書は神人乃木大將の生立ちより筆を起し、西南日清日露の三大役に於ける大將の活動、明治天皇に殉死し奉つた前後の顛末、大將の葬儀に至るまで詳かに述べた先生近頃の名著である。千古の大偉人たる故將軍の眞面目を知らんとする者に取つて實に絶好の良書であると共に、又精神修養書としての寶典である。

原田紫山先生著

お伽五十三次

袖珍頗美本

正價 二十錢

郵税 四錢

日本一の滑稽談は、東海道の膝栗毛と云ふ本だとは誰知らぬものもあるまい、彌次郎兵衛と北八が、江戸の八丁堀からてくく、五十三次海川百何十里の道中伊勢參宮、大阪見物、京都見物、行く先々で失敗滑稽のありだけを盡したた話、読んで笑ひ出さぬ人は口のない人、可笑しくない人は字が讀めぬ人、口があつて字が讀める人には是非讀んで戴かねばありません。

お伽俱樂部著

世界お伽噺

袖珍頗美本

正價 二十錢

郵税 四錢

お伽噺は何と云つても外國のお伽噺に限ると云はれて居る。本書は世界各國に名ある大家の名作十餘篇を撰び、一つとして駄作を交へない一粒撰りの良著と云ふべしである。お伽噺に興味ある諸君、乞ふ一讀して本書の價値を知り給へ。

お伽會著

お伽人情噺

袖珍頗美本

正價 二十錢

郵税 四錢

本書は明烏、ね染久松の如き人情噺を、お伽式に平たく分り易く書き綴つた珍らしい本である。讀んで喜怒哀樂の情を知り、諸君が成人の後の世渡術の一助ともなるべきもの、駄法螺交りのお伽噺と趣を異にして居る點が、本書の特色として誇るべきところであります。

原田紫山先生著

義士銘々傳

袖珍頗美本  
正價二十錢  
郵税四錢

四十七士の敵打、と聞いたけで恐らく諸君の腕は鳴り、血は躍るであらう。大石良雄以下の義士一同が、雪を踏んで吉良邸に打入るまでには、どれ程の困難を嘗めたであらう。どれ程の耻を忍んだであらう。聞くも語るも涙の種の義士の忠節、淺野内匠頭殿中の刃傷より泉岳寺引上、切腹まで、分り易く筋道を立て、詳しく書いた義士銘々傳、義士ビーク諸君の一讀を乞ふ。

274  
780

終

